

ヤンゴン素描 No. 31

山形洋一

雲南出土、七牛貯貝器^{ばい}

東京国立博物館（上野）の東洋館では、上海博物館との「競演」を開催している。上海から借り出し品の一つに、中国漢代の「七牛貯貝器（しちぎゅうちよばいき）」がある。その「牛」というのが、どうやらミャンマーの北部山地にも生息する野牛「ガウル」のようなので、紹介する。



出土地は、雲南省の南端にちかい、晋寧（しんねい、ジンニン）県、石寨で、発掘時、鼓の胴の形をした青銅容器の中は、タカラガイが詰まっていたそうだ。

「貯貝器」とは、つまり金庫のようなものだろうが、蓋の上で守る猛々しい七頭の「牛」の姿から、神聖視されていたことが伺える。

英語の表示“Oxen”は、去勢されたオスの牛を意味するが、いずれの個体も尻尾を巻き込んでいるので、睾丸の有無は確認できず、あるいは Bulls であるかも

しれない。すくなくとも中央壇上で咆哮する一頭の顔つきは、発情期のオスそのもので、腹の下に垂れているのは勃起途中のペニスであろう。

中国の動物彫刻では、唐三彩が有名だが、それより千年近く古い前漢の彫刻は、写実の厳しさと唐にまさる。時代的には、かの秦の始皇帝廟の兵馬俑が作られた直後なので、その伝統と技術が生きていたのだろう。この貯貝器の蓋の上の7頭もそれぞれ個性的で、牛に詳しい人が見れば、それぞれの年齢が推定できるのではないかと思われる。

ところでこの動物を単純に「牛」と呼ぶのは、考古学者の不見識だと思う。そもそも中国美術では、ウシ (*Bos taurus*) とは属の異なるスイギュウ (*Bubalus bubalis*) ですら、「牛」と呼んで憚らない。

両肩の間から背中中央にかけての筋肉の隆起や、角の間に見える頭頂の盛り上りは、インドからミャンマーにかけて棲息する野牛の一種、ガウル (*Bos gaurus*) の特徴を示している。

ただ、ガウルにしては角が長すぎるし、彫塑の表面を子細に見ると、毛の束が房のようになり、長毛を示唆する鑿(たがね)彫りもあるので、ガウルではなく、チベット高原に生息するヤク (*Bos grunniens*) なのかもしれない。

もともと、ヤクにしては、尻尾の基部が長毛で覆われていないのが気になる。

ガウルにせよ、ヤクにせよ、中国やインドの平地で飼われている「牛」でないことはあきらかだ。遠い南国の海からもたらされた貴重な宝を守るのに、山の精気を吸って育ったこの野獣が最もふさわしいと、宝の所有者は思い、注文を受けた鋳物師(いもじ)たちも、厳粛な気持ちでこの彫像を造ったのだろう。「一刀三札(いっとうさんらい)」という言葉を思わせる名品である。

ミャンマー在住の邦人の皆さんには、正月の一時帰国の折りなど、ぜひこの逸品を見てもらいたい。会期は2017年の2月26日まで。

また東洋館の地階には、フランスの極東文化研究所との所蔵品交換で入手した、クメール彫刻の名品がいくつか、常設展示されている。

(丁)